

はしがき

法律文化社から「法思想史の入門教科書」を編集してほしい、という提案をもらった時、私はそれぞれの時代と地域の法思想の専門家、あるいは深く研究を積んだ執筆者に執筆をお願いすることに決めました。

現在すでに容易に入手できる日本語の法思想の概説書や教科書は何冊もありますが（そのうち重要なものを0講の最後にあげました）、思想史というものはその対象への多年にわたる親炙が執筆者に存在しないと記述が平坦になりがちで、必要な情報を提供してはいても読者の印象に残らないままに終わってしまうということがありがちです。そんなことにならないよう、ある程度本書全体の統一性を犠牲にしても、私は各執筆者に各自の深い知見を利用してもらうように、そして過去の法思想がいかなる経路を通過して現代にまで流れているのかも書いてもらうように、お願いしました。また本書は通常の法思想史の書物と違って、法哲学者だけでなく法史学（法制史）の専門家の参加も仰いだことが特徴になっています。このことは、0講でも述べたように、法思想が法制度と深く関係しているという認識から来ています。

黒潮と親潮の交わる潮目が豊かな漁場であるように、法学と哲学と歴史学が交錯する法思想史は、多彩な知見に触れることができる興味深い学問分野です。読者が本書によって法思想史の面白さを実感して、さらに進んだ学習・研究に進んでもらえたら、編者としての喜びこれにすぎるものはありません。

読者のみなさんには、本書の、こうした「法思想の交錯した水脈」をたどって、法思想史の知と対話をしてもらいたいと希望します。

また本書は大学における法思想史の教科書としての使用を考えて編集しましたが、法哲学（法理学）のサブテキストとしても役立つと期待しています。各講は主要な哲学者・法学者の法思想への立ち入った理論的検討を含んでいるからです。

最後になりますが、6講を寄稿するだけでなく、トピックと執筆者の選択に

あたって法史学者の立場から助言していただいた一橋大学の同僚屋敷二郎教授と、最初から本書を計画し私に編者になるよう依頼して、原稿の取りまとめに尽力していただいた法律文化社の秋山泰氏にこの場を借りて深く感謝します。

2015年師走

森村 進